国語学習プリント

人生とは時をうつろう旅人である　生涯をかけ、人生の旅を続ける時の旅人

三年　組　番氏名〔　　〕

夏草――「おくのほそ道」から　　松尾芭蕉

1

月日は百代の過客にして、行きかふ年もまた旅人なり。④舟の上に生涯を浮かべ、⑤馬の口とらへて老いを迎ふる者は、日々旅にして旅をすみかとす。⑥……古人も多く旅に死せるあり。予もいづれの年よりか、片雲の風にさそはれて、漂泊の思ひやまず、海浜にさすらへて、去年の秋、江上の破屋に蜘蛛の古巣をはらひて、やや年も暮れ、春立てる霞の空に、白河の関越えむと、そぞろ神の物につきて心をくるはせ、道祖神の招きにあひて、取るもの手につかず、股引の破れをつづり、笠の緒付けかへて、三里に灸すゆるより、松島の月まづ心にかかりて、住めるかたは人に譲りて、杉風が別墅に移るに、

草の戸も住み替はる代ぞ雛の家

面八句を庵の柱に懸け置く。

2

三代の栄耀一睡のうちにして、大門の跡は一里こなたにあり。秀衡が跡は田野になりて、金鶏山のみ形を残す。まづ、高館に登れば、北上川南部より流るる大河なり。衣川は、和泉が城をめぐりて、高館の下にて大河に落ち入る。泰衡らが旧跡は、衣が関を隔てて南部口をさし固め、夷を防ぐと見えたり。さても義臣すぐつてこの城にこもり、功名一時の草むらとなる。「国破れて山河あり、城春にして草青みたり」と笠打ち敷きて、時のうつるまで涙を落としはべりぬ。

夏草や兵どもが夢の跡

卯の花に兼房見ゆる白毛かな

曾良

かねて耳驚かしたる二堂開帳す。経堂は三将の像を残し、光堂は三代の棺を納め、三尊の仏を安置す。七宝散り失せて、玉の扉風に破れ、金の柱霜雪に朽ちて、既に頽廃空虚の草むらとなるべきを、四面新たに囲みて、甍を覆ひて風雨を凌ぎ、しばらく千歳の記念とはなれり。

五月雨の降り残してや光堂

○ 読みを確認し、「1（冒頭部）」を暗唱しよう。〈思考・判断・**表現**〉

〈主体的に取り組む態度〉

1

①語句の意味

a 百代＝　　b 過客＝

②よって、「月日は百代の過客にして」＝

③また、この冒頭部は誰の詩の引用であるか。

〔　　〕

④これを引用しているということは？

【参考】（学習をつなげるために）

春夜宴桃李園序　李白

夫天地者万物之逆旅、光陰者百代之過客。

※夫れ天地は万物の※逆旅にして、※光陰は百代の過客なり。

※夫れ＝「そもそも」の意

※逆旅＝旅人を泊める宿

※光陰＝光（陽）「日」と陰「月」から月日

そもそも天地というものは全てのものの宿舎であり、月日（時間）というものは永遠の旅人である。の意。

⑤馬の口とらへて老いを迎ふる者＝

⑥……古人＝昔の人＝ここでは芭蕉の尊敬（敬慕）する詩人歌人をさす

その人物四人〔　　〕

これら古人の共通点＝

⑦芭蕉自身は何を思っていただろうか

⑧「江上の破屋」＝　　＝　　＝

⑨「股引の破れをつづり、笠の緒付けかへて、三里に灸すゆる」

つまり何してるのか？＝

⑩杉風が別墅＝芭蕉の門人、杉山杉風の別荘（彩茶庵）のこと

⑪　草の戸も住み替はる代ぞ雛の家　の句について

a季語〔　　〕b季節〔　　〕

⑫面八句→教科書P155脚注 参照

・面八句を掛けた場所＝

・面八句の内容＝

※俳句と言えば「芭蕉」と思われるかもしれないが。この時代（江戸元禄年間）ではまだ俳句という芸術は確立していなかった。俳諧連歌

この面八句を置く俳諧連歌の形態をとったということは？

☆考えよう

◎「1」とある「おくのほそ道」冒頭部分で芭蕉が述べようとしたこととは何か（冒頭部の意味）？ 次の各疑問を快刀乱麻を断つがごとく一挙に解決する方策を見つけよう。

・アなぜ今回の旅が陸奥（東北奥州方面）なのか

・イなぜ「蜘蛛の古巣をはらひて」の記述が存在するのか

・ウなぜ「白河の関越えむと」と白河の関を持ち出したのか

・エなぜ「住めるかた（芭蕉庵）」を譲ったのか

・オなぜ面八句を庵の柱に懸け置いたのか

コラム

芭蕉の想い

「おくのほそ道」は中学国語の集大成である。

紀行文ではあるが、そのような文学ジャンルには収まりきらないものと言える。

「つながり」という点に着目する。「芭蕉」ならば、彼に影響を与えた人とは、古人（李白・杜甫・西行・宗祇）である。しかし、この四人だけではないのであろう。西行で言うなれば、西行が何を思い旅をしていたのかという本質に迫りたかった気がしてならない。どんな状況下で何を案じ、何をしようとしていたのか、古人の時代の中における様態と同化したかったのではなかろうか。同化できれば思いの底が垣間見えると信じたのではなかろうか。西行は二度陸奥への旅を志した。一回目の理由は定かにされてはいないが、西行が師と仰ぐ能因法師の足跡をもって境地を知りたかったのではないか。このように「古人」がさらなる「古人」の境地を知ろうとする繋がりが見てとれる。西行二回目の陸奥への旅は名目上君らも行く予定であった奈良東大寺焼失に伴う勧進であったとされる。途中鎌倉で源頼朝と面会したのは、旅の目的を伝え、平泉巡行の許可を得るためとされる。西行と奥州藤原氏は祖先に鎌足公を持つもの、いわゆる親戚である。それを知っているうえで頼朝は許可したのであろう。

鎌倉（中央）が奥州（藤原氏）に睨みをきかせる構図。そのはざまで隠密のごとく平泉へ向かう元武士西行。

芭蕉がおくのほそ道の旅に出た一六八九年に照らすと、「東照宮元禄の大修理の命が伊達藩に命じられた」頃と考えられ、江戸（中央）が伊達藩（仙台藩）に睨みをきかせた構図となり、西行の奥州行の頃と符合する。

おそらく芭蕉は敬慕（尊敬）する師である西行の心境に少しでも近づかんとしたのであろう。「おくのほそ道」の旅は、西行巡礼の旅であったと言える。

では、なぜ芭蕉は平泉の後、北陸（日本海）を通るルートをとったのか。芭蕉は、義経を案じていたであろう藤原秀衡を訪ねた西行の動向とも重なり、源義経が平泉へ逃げ入ったルートを模索する意味で（源義経が平泉に入ったルートは明らかにされていない）、その候補の一つ、義経記や歌舞伎の演目「勧進帳」にある北陸路を逆走するルートを採ったのではなかろうか。芭蕉自身も義経や弁慶に対する想いを強く持っていたのだろう。

「繋ぐもの」は「勧進」という名目。山伏に化けて東大寺勧進の旅であるとして難関突破を図った「勧進帳」。東大寺への寄進（勧進）として、黄金の国ジパングと世界に轟かせることとなる平泉に赴く西行。御恩と奉公のはざまで苦しむ伊達藩を気づかっているかの芭蕉。

白河の関は、藤原秀衡が自分たちの勢力の及ぶ目安であり、なんとか義経一行がそこを越え逃げ延びてさえくれればと願った地点でもあろう。

「時の旅人」と言えるものは、李白、西行。「時間」という概念を詩に盛り込み、古人の想いに寄り添った。芭蕉もしかりである。

「おくのほそ道」冒頭は、時の中に留まる「自分の家＝芭蕉庵」を旅立たせる門出の段であったと言える。庵の柱に掛けた面八句には、「草の戸も…」の発句一句のみが記されており（俳諧連歌の師、宗祇をたてたものと思われる）、その続きは、庵が新たな住人とともに新たな人生を紡いでいってほしい（連句として書き綴っていってほしい）と願った庵の門出の段なのだ。

「おくのほそ道」「平泉」のところで、芭蕉が思い浮かべる「国破れて…」という杜甫の詩「春望」の一節。この無常観のルーツとあいまって、芭蕉の芸術（蕉風）的境地と共鳴したのであろう。

事実と虚偽は区別しなくてはならぬだろうが、わからないところは、想像を駆使し、想像を確かめるべく、感じ取るべく動いた古人がいたとしてもおかしくはないだろう。その一人が芭蕉なのである。

2021. 9. 1

能因（のういん、永延二年（988年）- 永承五年（1050年）あるいは康平元年（1058年））は、平安時代中期の僧侶・歌人。初め文章生に補されて肥後進士と号したが、長和二年（1013年）、十六歳で出家した。 ―略― 甲斐国や陸奥国などを旅し、多くの和歌作品を残した。

〔Wikipedia〕より 抜粋

〈おもな歌〉

あらし吹く みゐの山の もみぢばは
竜田の川の 錦なりけり 【小倉百人一首】

都をば霞とともに立ちしかど
秋風ぞ吹く白河の関 【古今著聞集】

→

この歌、能因は白河には旅したことがなかったが、旅に出たと偽って作った歌とされる。

西行（さいぎょう、元永元年〈1118年〉- 文治六年二月十六日〈1190年三月三十一日〉）は、平安時代末期から鎌倉時代初期にかけての日本の武士（北面の武士）であったが、出家した。僧侶、歌人。陸奥への旅は二度あるが、二度目の陸奥行きは、東大寺再建の勧進のためとされている。この時、鎌倉で源頼朝に面会し、旅の許可をえて藤原秀衡のいる平泉へと赴く。

〈おもな歌〉

嘆けとて月やはものを思はする
かこち顔なるわが涙かな 【小倉百人一首】

道の辺に清水流るる柳陰
しばしとてこそ立ちどまりつれ 【新古今和歌集】

→

この歌の場所は、「遊行柳」として歌枕となっている芦野。白河の関の手前にある。

松尾 芭蕉（まつお ばしょう、寛永二一年（正保元年）（1644年）- 元禄七年十月十二日（1694年十一月二八日）、江戸時代前期の俳諧師。伊賀国阿拝郡（現在の三重県伊賀市）出身。芭蕉は、和歌の余興の言捨ての滑稽から始まり、滑稽や諧謔を主としていた俳諧を、蕉風と呼ばれる芸術性の極めて高い句風として確立し、後世では俳聖として世界的にも知られる、日本史上最高の俳諧師の一人である。但し芭蕉自身は発句（俳句）より俳諧（連句）を好んだ。

〔Wikipedia〕より 抜粋

〈おもな句〉

田一枚植ゑて立ち去る柳かな 【おくのほそ道 芦野】

閑かさや岩にしみ入る蝉の声 【おくのほそ道 立石寺】

五月雨をあつめて早し最上川 【おくのほそ道 最上川】

源義経について

平家物語　二年次に学習済み

義経記　源義経とその主従を中心に書いた作者不詳の軍記物語。全八巻。南北朝時代から室町時代初期に成立したと考えられている。能や歌舞伎、人形浄瑠璃など、後世の多くの文学作品に影響を与え、今日の義経やその周辺の人物のイメージの多くは『義経記』に準拠している。「如意の渡し」（現富山県高岡市）の話が有名。ただし英雄伝的で虚構も多いといわれている。

勧進帳　如意の渡しでの出来事を基軸にした能の演目『安宅』を元に創られた歌舞伎の演目。歌舞伎十八番の一つ。勧進帳では、「如意の渡し」の舞台が加賀国安宅の関（現 石川県小松市）に変更されている。

かつて源義経・弁慶主従が奥州落ちの途中、乗船の際に怪しまれ弁慶が義経を扇で打ちのめす機転で無事対岸にわたることが出来たという伝説の残っている場所

勧進とは
人に勧めて仏道に入らせ、善根功徳を積ませること。勧化ともいう。たとえば念仏を勧めることを念仏勧進という。転じて、善根を積ませる意味で、寺院を建立・修繕する際、信者・有志者に説き勧めて費用を奉納させることをも意味した。
コトバンク（日本大百科全書（ニッポニカ））からの抜粋

念珠関（鼠ヶ関）〔山形県鶴岡市鼠ヶ関〕での一件とも言われる。

源頼朝の追手を逃れ、奥州に落ちのびる途上の義経一行が、弁慶の機転と関守富樫氏の温情で無事通ることができたという「勧進帳」の名舞台